

資料紹介「山田七五郎旧蔵資料」



建設工事中の開港記念横浜会館
資料 5-1-2



開港記念横浜会館開館式（大正6年）
資料 44



大正12年当時の横浜市建築課職員
資料 5-7-1

資料紹介「山田七五郎旧蔵資料」



長崎県庁舎関係写真（『写真帖』より）

資料 6, 7



大倉山公園（『写生帖』より）資料 9, 10

資料紹介「山田七五郎旧蔵資料」

青木祐介

1. はじめに

横浜都市発展記念館では、平成28(2016)年7月に「山田七五郎旧蔵資料」の寄贈を受けた。山田七五郎(1871～1945)は、大正期から昭和初期にかけて横浜市技師として活躍した建築家であり、大正9(1920)年に組織された横浜市臨時建築課の初代課長として、そして大正11(1922)年からは横浜市建築課長として、市の営繕組織を率いて公共建築の建設を牽引した人物である。

横浜市建築課の関係資料としては、関東大震災からの復興事業で建設された公共建築の青焼図面が当館に寄贈されているほか、山田と同じく横浜市技師を務めていた木村龍雄の旧蔵資料が当館および横浜開港資料館に寄贈されている¹。本資料は上記2つの資料群に連なるものと位置づけられ、横浜市の営繕事業を歴史的に明らかにする資料として、また山田七五郎という一人の建築家の経歴を明らかにする資料として、大きな価値をもつものである。

本資料は山田七五郎の孫にあたる中嶋宏子氏から寄贈を受けたもので、横浜市中区地域振興課の仲介により、当館で保存・活用する運びとなった。資料には山田七五郎の長男である山田直枝氏の関係資料も数件含まれているが、ここでは山田七五郎の旧蔵資料だけをまとめて目録を掲載し、そのなかの写真資料から横浜に関係するものを選択して紹介したい。

2. 建築家山田七五郎について

横浜における山田七五郎の活動については、横浜市営繕組織に関する堀勇良氏および鈴木正巳氏の研究のなかで触れられているが²、近年は高嶋猛氏の研究により、横浜市に着任する以前の長崎時代の詳細も明らかになってきている³。これらの先行研究に加えて本資料に含まれる履歴書(資料1)も参考にしながら、まずは山田七五郎の略歴について簡単に紹介しておきたい。

山田七五郎は明治4(1871)年2月1日に京都府に生まれている。明治32(1899)年7月に東京帝国大学工科大学建築学科(前年に造家学科から建築学科へ改称)を卒業し、その後、有栖川宮邸御建築掛、文部省建築課福岡出張所長心得・長崎出張所長心得などを経験したのち、明治38(1905)年8月に長崎県技師として職を得ている。この時代に長崎県会議事院(明治43年)、長崎県庁舎(明治44年)などの設計監督を担当したほか、大正2(1913)年3月からは長崎市の技師も兼任し、長崎市庁舎(大正3年)を手がけている。

そして大正3(1914)年4月に、開港記念横浜会館(現・横浜市開港記念会館)の建設担当として、山田は長崎から横浜へと活動の場を移す。横浜市では、前年に開港記念横浜会館の設計案のコンペがおこなわれて、福田重義による

1 拙稿「岩崎金太郎旧蔵建築図面」『横浜都市発展記念館紀要』第2号(2006年)、および拙稿「横浜市技師がみた震災復興－木村龍雄旧蔵資料より－」『横浜都市発展記念館紀要』第9号(2013年)。

2 堀勇良「横浜市建築局前史」『昭和を生きぬいた学舎－横浜震災復興小学校の記録』(横浜市建築局学校建設課／横浜市教育委員会施設課、1985年)、同「横浜建築家事典稿」『横浜・都市と建築の100年』(横浜市建築局企画管理課、1989年)、鈴木正巳「横浜震災復興期の設計集団」『昭和を生きぬいた学舎』。

3 高嶋猛『建築家山田七五郎の活動を通してみた官庁営繕組織の研究－長崎県営繕組織の活動を中心として』(私家版、2003年)

一等案が決定したところであり、その実施設計の担当として山田は採用された。当時の横浜市長荒川義太郎は前職が長崎県知事であったことから、県庁舎の設計でその腕前をよく知る山田に白羽の矢を立てたと考えられる。また山田の横浜市着任に続いて、木村龍雄や北川満多雄ら長崎県時代の部下たちも相次いで横浜市に採用されている。開港記念横浜会館の担当者名には木村の他に、長崎県庁舎のスタッフでもあった宮本岩吉と上田改平の名前もあり、のちの横浜市営繕組織の基礎が山田七五郎の長崎県時代から培われてきたことがうかがえる。

当時の横浜市はまだ営繕専門の部署がなかったため、開港記念横浜会館が完成したのは、山田を中心としたチームは、最初期の鉄筋コンクリート構造の小学校建築である市立尋常寿小学校（大正9年）や、市の社会事業の一環として建設された中村町市営住宅地（大正10年）の建設に次々と携わっている。

こうした公共施設の建設需要の増加にともない、単独の営繕部局が組織されるのが大正9（1920）年のことであり、横浜市臨時建築課が誕生する。山田は18人からなる同課の初代課長に就任し、そして大正11（1922）年からは横浜市建築課長として采配を振るった。市建築課としての活動のピークは、翌年に発生した関東大震災からの復興事業であり、多いときには100人を超えるスタッフを率いて、山田は市営住宅や市立小学校、病院や図書館などの公共施設の震災復興に取り組んだ。

震災復興事業がひと段落した昭和4（1929）年5月、山田は建築課長の座を鳥海他郎に譲り、横浜市を退職する。このとき58歳であった。

3. 資料の概要

資料目録は別掲のとおりである。資料は全10件からなり、文書・写真・絵画の順に分類した。このうち単体写真2件（資料4, 5）については、さらに枝番号を付している。以下、順を追って資料の概要を紹介する。

資料1は、山田七五郎の直筆による履歴書である。明治32（1899）年7月の東京帝国大学工科大学建築学科卒業から始まり、横浜市を退職したのちの昭和5（1930）年4月に、最後の職として、横浜市立女子専修学校（現・横浜市立みなと総合高等学校）の講師に就くまでの履歴と、大正3（1914）年4月9日に横浜市の技師を任ぜられてから、大正13（1924）年8月31日に横浜市建築課長として年俸を受けとるまでの履歴の2種類が記されている。とくに横浜市在任中の履歴を記した後者は年月日まで細かく入ったもので、山田が大正期に横浜市で担当した業務内容が判明する。

資料2は、最初の頁に「山田蔵書印」が捺されており、東京帝国大学工科大学建築学科在籍時代の講義ノートと思われる⁴。中身はすべて英語で綴られており、建築の基礎構造に関する内容が項目別に丁寧に書かれている。その他、手書きの構造図や応力図、また明治36（1903）年から同38（1905）年にかけて担当していた京都帝国大学福岡医科大学衛生学法医学教室新築工事の予算書などが挟み込まれている。

山田が東京帝国大学工科大学に在籍していたのは、明治32（1899）年7月までの3ヵ年であるが、この時期の建築構造学の教育は、3年間のカリキュラムのうち2年目に「家屋構造」の科目名でおこなわれており、明治20（1887）年以来、工科大学で建築構造や材料、衛生など幅広い分野で教鞭を執っていた中村達太郎が担当してい

4 ノートには山田直枝氏による1989年作成のメモが貼られており、「（前略）在学中に自筆で講義を記録したものと思われ、日本の大学教育の歴史的記録と思われるので保存したい」と書かれている。

た⁵。工科大学時代の建築教育の一端をうかがい知ることのできる資料といえるだろう

資料3は、建築学会が発行した一枚物の印刷物で、明治42(1909)年1月29日の建築学会総会において決定した「建築技師報酬規定」の内容を記したものである。建築技師が工事の種類や工費に応じて受けとる報酬の内容が示されており、図面や仕様書などの設計図書著作権について「建築技師に専属する」と明記されている。当時はまだ建築家の職能が確立していなかった時代であり、民間の設計事務所が増えるなかで、標準となるべき設計報酬の指針として、建築学会(現・日本建築学会)が作成・提示したものである⁶。

資料4と資料5は、単体写真としてそれぞれ封筒に収められていたものである。資料4は単体写真5点からなり、資料5は7枚の台紙に合計23点の写真が貼られているため、資料4は写真1点ごとに4-1～4-5まで、資料5は台紙1枚ごとに5-1～5-7まで枝番号を振った。さらに資料5は台紙の両面に写真が貼られているため、表裏それぞれにさらに枝番号を振って5-1-1～5-7-2までとした。また台紙に複数枚の写真が貼られている場合、写真目録の頁には代表的な写真のみを選択して掲載した。

資料4-1は葉書に印刷されたもので、山田七五郎と3人の人物が写っている。背後に写っているのは開港記念横浜会館(大正6年)に設置予定の天井画で、椅子に座る山田七五郎の真後ろに立っているのが、天井画の制作を手がけた洋画家の和田英作(1874～1959)である。そして和田の制作助手を務めた安藤東一郎と有田四郎(左端)と一緒に写っており、正装の4人の姿

から、写真は天井画の完成記念として撮影されたと考えられる。

和田英作が描いた開港記念横浜会館の壁画と天井画については、手塚恵美子氏の研究に詳しい⁷。手塚氏の研究によると、この写真葉書と同じものが有田四郎のご遺族のもとに残されており、宛名・通信欄の記載から大正6(1917)年6月22日に天井画が完成したか、もしくはこの記念写真が撮影されたと推測されている。本資料の宛名・通信欄には何も書かれていないが、山田も含めた制作関係者にこの葉書が配られたとみてよいであろう。

そして和田英作は、上記の天井画とあわせて《開港前の横浜村》《大正期の横浜港》の一对の壁画を制作している。これらは大正12(1923)年の関東大震災で焼失してしまうが、壁画については新たに描き直され、昭和2(1927)年に完成したものが現在2階ホールに掲げられている。ただし、設置場所も寸法も当初のものとは異なっている。

資料4-2は、その一对の壁画のひとつ《開港前の横浜村》で、資料4-3は先の天井画である。壁画については、開港記念横浜会館が完成したときの記念絵葉書にその絵柄が掲載されているものの、壁画そのものを写した資料はなく、階段室に掲げられている様子が竣工写真にうかがえるのみであった。また天井画についても2階ホールの竣工写真の端部にかろうじて存在が確認される程度で、資料4-2、4-3ともに、完成当時の壁画・天井画の全体像を記録した貴重なものである。当時、和田英作は横浜公園内のクリケット倶楽部を制作の場としており、資料4-2の右端に天井画が写っているとおり、同所で完成した

5 工科大学時代の建築教育については、角田真弓『明治期建築学における知識と技術の受容』(私家版、2016年)が詳しい。カリキュラムや講義担当者については、同論文の巻末資料を参照した。

6 藤井正一郎「建築家の誕生と建築設計事務所の創立」『日本近代建築学発達史』(丸善、1972年)

7 手塚恵美子「港都横浜の意気を示すー横浜市開港記念会館(旧開港記念横浜会館)の装飾壁画について(一)～(三)ー」『明星大学研究紀要【人文学部・日本文化学科】』第21～23号(2013～2015年)、同「フェリス和英女学校から描かれた大正期の横浜港ー横浜市開港記念会館(旧開港記念横浜会館)の装飾壁画」『フェリス女学院資料室紀要あゆみ』第69号(2016年)。

壁画・天井画を撮影したのであろう。

資料4-4、4-5は、大正6（1917）年7月1日におこなわれた開港記念横浜会館の開館式を写したもので、撮影アングルからみて、会堂の2階席正面から壇上を捉えたものである。開館式当日の様子は『横浜貿易新報』に詳しく報告されており⁸、来賓の大隈重信による祝辞の場面の写真が掲載されているが、資料4-4（口絵3）は山田七五郎が冒頭で会館の建築について報告している場面で、左後ろに安藤謙介市長が座っている。資料4-5は国歌斉唱の場面であろうか、来賓全員が壇上に立って並んでおり、壇上左側に安藤市長（手前）と山田（奥）が立っている。

資料5-1-1は壁画制作中の和田英作で、和田が視線を向けているのは、『開港前の横浜村』（4-2）と対で制作された『大正期の横浜港』である。画面右側には下絵とみられるキャンバスがイーゼルに架けられているほか、壁画の左上にはさらに小さな下絵のようなものが貼られている。これも資料4-2、4-3と同じく、クリケット倶楽部内で撮影されたものと思われ、和田の壁画制作過程を検証することのできる非常に貴重な写真といえる。

資料5-1-2（口絵3）は、建設工事中の開港記念横浜会館で、時計塔を含めた屋根部分の工事がほぼ完了しているところから、大正5（1916）年末頃の撮影と思われる。和田英作が上記の壁画・天井画の制作に入るのは、これらの躯体工事が終了したあとの大正6（1917）年3月からである。

資料5-2-1は、昭和4（1929）年4月23日におこなわれた天皇の横浜行幸で、横浜商工奨励館に天皇が到着した様子を撮影したもの。関東大震災後の復興事業では、山田率いる横浜市建築課は住宅・学校・病院など各分野に技師を配置して公共施設の復興にあたったが、復興事業の掉

尾を飾ったのが昭和4（1929）年に完成した横浜商工奨励館（現・横浜情報文化センター）であった。開港記念横浜会館の復旧を手がけた木村龍雄が設計を担当した。写真は『横浜復興誌』⁹に掲載されたものと同じである。

資料5-2-2は、山田の胸像が制作されたときの除幕式である。山田は震災復興事業が終了したのち、昭和4（1929）年5月に横浜市を退職するが、同年10月に撮影されたこの写真から判断して、胸像は退職記念として市から贈られたものであろう。椅子に座った山田の隣りにいる学生服姿の2人は山田の子であろうか。その隣りに後継の鳥海他郎課長の姿が見える。そして山田の左手前には木村龍雄が座っている。現在この胸像は、開港記念会館の2階資料室に展示されている。資料5-3-1はその胸像の写真。この台紙には他にもプライベートの旅行写真が8点貼られていたが、写真の掲載は省略した。

資料5-4-1は、昭和4（1929）年5月の「工手学校卒業生謝恩会」と書かれている。資料1の履歴書によると、山田は明治33（1900）年2月から工手学校造家学科で製図を教えており、その縁で招待されたものであろう。ちょうど横浜市を退職した頃の写真である。

資料5-4-2は「開港記念横浜会館常設委員」とある。関係者の集合写真は、会館の竣工写真帖である『開港記念横浜会館図譜』¹⁰にも収録されているが、同所収録の写真が市長を中心に42人の集合写真であったのに比べて、この写真には山田を含めてそのなかの9人が集まって別途撮影されたものである。

資料5-5-1には写真2点が貼られており、2点とも写真を掲載した。どちらも長崎時代に撮影された写真であるが、注目されるのは資料5-5-1.2の方で、明治44（1911）年に竣工した長崎県

8 『横浜貿易新報』1917年7月2日号。

9 『横浜復興誌』第四編（横浜市役所、1932年）

10 『開港記念横浜会館図譜』（清水組横浜支店、1917年）

庁舎の完成記念で撮影されたと思われる。長崎県庁舎の工事では、山田の師である辰野金吾が工事顧問に就いていたこともあり、資料5-5-1.2には山田たちと一緒に辰野が写真に収まっている。後列右端にいるのが辰野金吾で、その隣りが山田である。当時のスタッフのなかには、のちに山田を追うように横浜市へと仕事の場を移す者もあり、前列左から2番目に座っている人物は、横浜市建築課で山田の部下となる北川満多雄である。なお、これと同じ写真が資料7の写真帖に含まれている（口絵4）。

資料5-5-2、5-6-1は、大正9（1920）年に完成した肺結核療養所の落成式。療養所の建築事務担当に山田の名前は見られないが、竣工を記念して撮影されたと思われる2点にはいずれも山田の姿が見える。資料5-5-2では中央（左から7人目）に山田が、その左に木村龍雄が写っている。資料5-6-1では中央に写っている背の高い人物が当時の横浜市長久保田政周で、山田はその左にいる。台紙に「大正十年」とあるのは山田の記憶違いか。

資料5-6-2には写真3点が貼られているが、プライベートな写真を除いて「横浜開港記念会館建築負」と記された写真を掲載した。大正4（1915）年とあるから山田が横浜に着任した翌年の撮影である。山田を中心に7人のスタッフが集まっているが、山田（後列中央）の左に立つ宮本岩吉、右端に立つ上田改平の2人は、山田のもとで長崎県庁舎の建設に関わった人物である。撮影場所は本町1丁目の会館建設予定地であろうか。

資料5-7-1（口絵3）は、大正12（1923）年に撮影された横浜市建築課の集合写真である。前述したとおり、前年に臨時建築課から建築課へと組織が改変され、山田は引き続き、課長の職を務めている。山田は前列左から3番目に写っているが、その右隣りに木村龍雄、木村の右斜め後ろに北川満多雄、その右隣りに徳永熊雄と、震災復興事業で活躍する顔ぶれがうかがえる。

資料6、7は、長崎時代の写真帖である。それぞれ同サイズの折本で、資料6には49点、資料7には47点の写真が貼られている。写真のなかには撮影年月日を記したものもあるが、ほとんどが明治43（1910）年以降、山田が長崎で活動していた時代のものである。山田が関わったと思われる長崎での建設現場の写真、長崎や福岡あるいは韓国での建築写真などが収められている。口絵4では、そのなかから明治44（1911）年に竣工した長崎県庁舎に関する写真を掲載した。県庁舎に関しては、建設中の工事写真をはじめ竣工写真、開庁式の写真などが豊富に収められている。

資料8は、『震災復興写真帖』として知られる写真帖の英語版である。この英語版は、関東大震災時にアメリカから寄せられた多大な援助に対する感謝の記念品として製作されたもので、昭和5（1930）年3月から2ヵ月にわたって派遣された遣米答礼使の手によって、アメリカ各都市へ贈呈された。普及版として制作された日本語版に比べて、英語版の寸法は280cm×383cmと大きい。

資料9、10の2冊の写生帖（口絵4）には、昭和10（1935）年～同16（1941）年にかけて、山田が訪れた先々で自然の風景を描いた水彩のスケッチが収められている。横浜市を退職後、自ら「鳩嶺山人」と名乗り、昭和10（1935）年5月から描き続けたスケッチは、最終的に写生帖2冊分のボリュームとなった。なお資料10には、終戦後の昭和21（1946）年6月27日号の『時事新報』が挟み込まれている。とくに山田との関連を示す記事が出ているわけではないが、前年の同日が山田の命日であり、一周忌に記念として取っておかれたものであろうか。

4. おわりに

以上、山田七五郎旧蔵資料について、その概要を簡単に紹介してきた。冒頭で述べたとおり、

大正期から昭和初期における横浜市の営繕事業を担った建築家の資料として、非常に大きな価値をもつものといえる。のちの横浜市の営繕組織が山田の長崎時代との強い縁をもって形成されたことが、豊富な写真資料からもあらためて確認できたことに加えて、横浜における山田の代表作ともいえる横浜市開港記念会館の建設過程に関わるあらたな資料が発見された点は大き

い。和田英作による壁画の制作過程を解明するための貴重な手がかりになると思われ、今後の研究の進展に寄与するものと期待される。

最後に、貴重な資料をご寄贈くださった中嶋宏子氏にこの場を借りて感謝申し上げます。また和田英作の壁画制作については、手塚恵美子氏（日本女子大学）に多くのご教示を賜りました。あわせて感謝申し上げます。

山田七五郎旧蔵資料

〔凡例〕

- 1 資料名は旧蔵者による書き込みなどを参考に作成者が付けたものである。
- 2 資料年代は和暦で統一し、内容から推定したものには〔 〕を付した。
- 3 資料寸法はミリメートルで採寸し、縦×横の順に記載した。ただし、5-1～7の寸法はいずれも台紙の寸法であり、写真頁に掲載した画像は、台紙から写真部分だけをトリミングしたものである。

資料番号	名称	年代	寸法 (mm)	備考
1	山田七五郎履歴書	〔昭和 5 年〕	282 × 200	
2	受講ノート（東京帝国大学工科大学建築学科）	〔明治 31 年〕	212 × 175	基礎構造図・応力図・ジョイント図・地層図など手書き図面 10 点、工事予算書 2 点挟み込み
3	建築技師報酬規定	〔明治 42 年 1 月〕	345 × 635	
4	1 写真〔天井画前の 4 人〕	〔大正 6 年〕	90 × 140	葉書仕様
	2 写真〔壁画《開港前の横浜村》〕	〔大正 6 年〕	98 × 146	裏面に「昔の横浜 開港記念会館壁画 和田英作画伯」とあり
	3 写真〔天井画〕	〔大正 6 年〕	105 × 129	
	4 写真〔開港記念横浜会館開館式〕	〔大正 6 年 7 月 1 日〕	148 × 104	
	5 写真〔開港記念横浜会館開館式〕	〔大正 6 年 7 月 1 日〕	104 × 148	
5	1 1 写真〔制作中の和田英作〕	〔大正 6 年〕	178 × 218	
	2 写真〔建設工事中の開港記念横浜会館〕	〔大正 5 年〕		
	2 1 写真〔商工奨励館への天皇行幸〕	〔昭和 4 年 4 月 23 日〕	211 × 265	台紙に「昭和四年四月二三日天皇陛下横浜二行幸復興ヲ御視察アラセラル、商工奨励館臨御ノ状況」とあり
	2 写真〔胸像除幕式〕	〔昭和 4 年 10 月〕		台紙に「昭和四年十月胸像除幕式」とあり
	3 1 写真〔山田七五郎胸像ほか〕	〔昭和 5 年〕	246 × 296	
	2 〔裏面なし〕			
	4 1 写真〔工手学校卒業生謝恩会〕	〔昭和 4 年 5 月〕	246 × 296	台紙に「昭和四年五月工手学校卒業生謝恩会」とあり
	2 写真〔開港記念横浜会館常設委員〕	〔大正 6 年〕		台紙に「大正六年開港記念会館常設委員建築落成ノ喜ビ」とあり
	5 1 写真〔事務所にて／辰野金吾を迎えて〕	〔明治 43-44 年〕	247 × 297	台紙に「明治四十三年建築事務所ニテ」「明治四十四年辰野博士ヲ■ ■」とあり
	2 写真〔結核療養所落成式〕	〔大正 10 年〕		台紙に「大正十年結核療養所落成式の日」とあり
	6 1 写真〔結核療養所落成式〕	〔大正 10 年〕	247 × 297	台紙に「大正十年結核療養所落成式の日」とあり

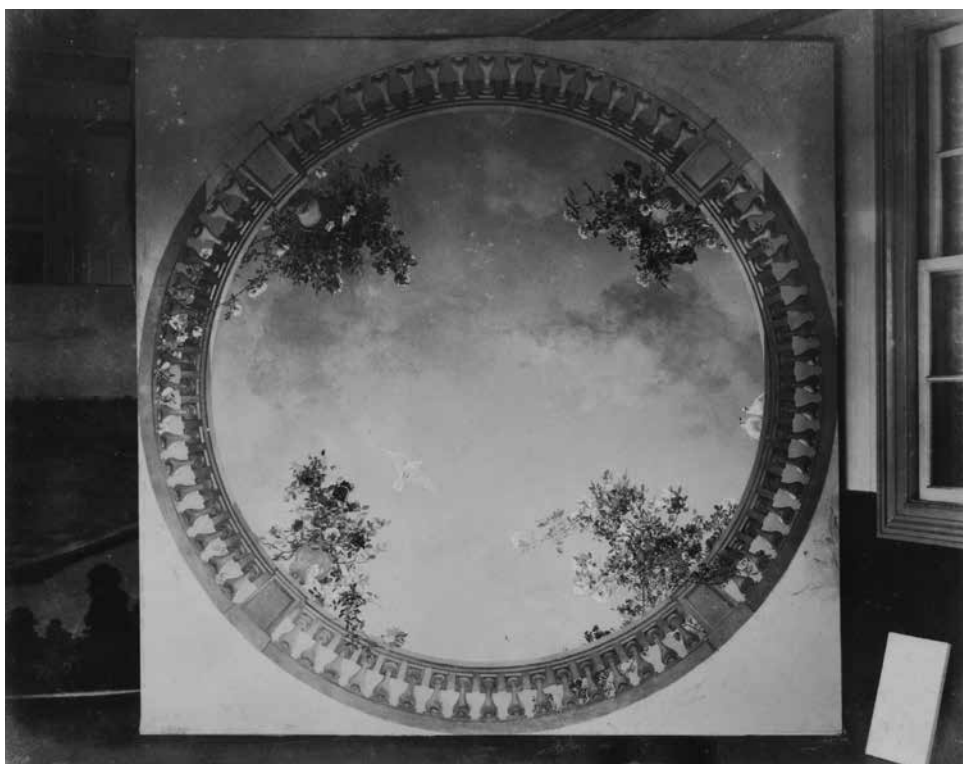
資料番号			名称	年代	寸法 (mm)	備考
		2	写真〔開港記念横浜会館建築担当ほか〕	[明治44年、大正4年]		台紙に「大正四年横浜開港記念会館建築負」とあり
	7	1	写真〔横浜市建築課職員〕	[大正12年]	246 × 290	台紙に「大正十二年横浜市建築課員」とあり
		2	〔裏面なし〕			
6			写真帖（長崎、長崎県庁舎工事現場ほか）	[明治43年]	130 × 185	
7			写真帖（長崎、長崎県庁舎開庁式、宝塚、韓国ほか）	[明治44年-大正5年]	130 × 185	
8			『Yokohama Reconstructed 1929』	[昭和4年]	280 × 383	
9			写生帖（谷川温泉、千ヶ瀧、京都ほか）	[昭和10-13年]	258 × 188	大連の絵葉書2点挟み込み、末尾に説明書きあり
10			写生帖第2帖（鹿沼、伊豆、鬼怒川ほか）	[昭和13-16年]	270 × 195	『時事新報』（昭和21年6月27日）挟み込み、末尾に説明書きあり



資料 4-1



資料 4-2



資料 4-3



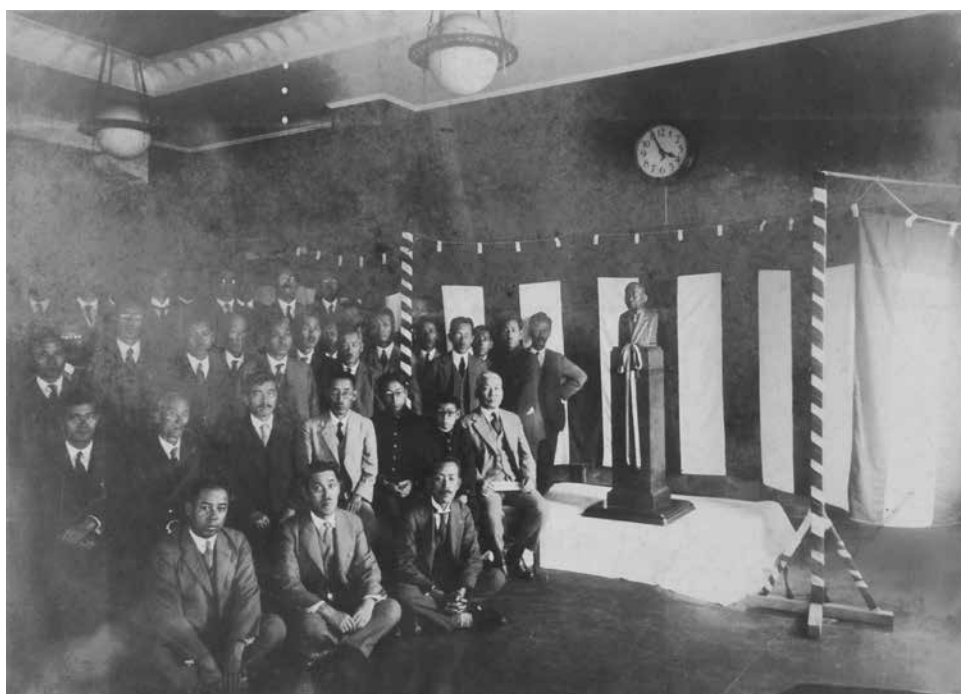
資料 4-5



資料 5-1-1



資料 5-2-1



資料 5-2-2



資料 5-3-1



資料 5-4-1



資料 5-4-2



資料 5-5-1.1



資料 5-5-1.2



資料 5-5-2



資料 5-6-1



資料 5-6-2